浦賀文化

第７８号
令和６年７月１日発行

Email:uragabunka@yahoo.co.jp

鳳凰丸の建造②
― 鳳凰丸の大砲 ―

鳳凰丸（幕末浦賀軍艦建造記より）

初の純国産洋式船である鳳凰丸は建造期間がおよそ九ヶ月と、当時としては非常に短期間で造られている。しかし完成までのすべてが順調だったわけではなかった。

問題となったのは備え付ける大砲の制作である。鳳凰丸の備砲は「七貫五百目玉盆弁カノン四挺・三貫目シキツフカノン六挺」の洋式砲合計一〇挺の予定だった。「盆弁カノン」とは「ボムカノン」のことで榴弾砲のことである。浦賀奉行戸田氏栄と井戸弘道の両名は、これらの鳳凰丸に備え付ける大砲やその他の小銃・槍といった武装の経費について鳳凰丸建造が始まった嘉永六年（一八五三年）九月に「九千三百弐拾四両弐分余」と見積もりを出している。それらの制作の許可が下りたのが十一月で、実に二ヶ月もかかっている。このことについて戸田は「何たる御悠長に候哉」と呆れている。ようやく大砲制作に取り掛かったのだが、スムーズに鋳造されたわけではなかった。許可が下りて二ヶ月後の嘉永七年（一八五四年）二月の段階で、三貫目の大砲が六挺できていたが、それから四ヶ月後の六月の乗り試しの際にもまだ「大砲八挺据打方等仕候丈ケ之儀ハ出来仕」とあり、この段階でも予定していた十挺はできていなかったことが伺える。

なぜ大砲の鋳造は難航したのか。それは、大砲を作るために必要な材料である錫の値段が高騰して思うように集まらなかったからである。浦賀奉行の戸田・井戸の両名も見積もりを出した時点で「当節地銅・錫共到而払底シ直段引上候趣承知仕」と大砲の素材となる銅と錫の値上がりを承知してはいた。見込みとしては「可成丈ケ浦賀表ニおゐて御買上之心得ニ而」と浦賀での調達を予定しており、必要な量は浦賀奉行所で以前より集めていた分を充てることとし、更に「浦賀近在房総州辺其他より も御買上之見込ニ有之候」と浦賀周辺地域からも買い上げて揃える見込みであった。ところが、見積もりを出した九月の段階で「錫一貫ニ付、代銀三百拾五匁」だったものが、翌年の嘉永七年二月頃には「代銀八百匁前後」と約二・五倍に高騰してしまったのである。そこで浦賀奉行は、仕方がないのでこの高騰した錫を買い、予算を超過した分については後で取り調べて報告すべきかと連名で伺いを立てている。

戸田が翌三月に出した上申書によると、この錫の価格は「上錫之分七百目内外」に下落したという。下落したとはいえ品質の良い錫の価格は当初の二倍。しかしながら再び値上がりするかもしれず、また職人の都合もあり急ぎのことなのでと、戸田はひとまずこの価格で買い上げることとすると幕府に上申している。

ここで興味深いのは、高騰していた錫の価格の下落についての戸田の見解である。戸田は「諸家大砲鋳立多分見合ニ相成居、其上亜米利加船平穏ニ退帆可相成趣響候哉ニ而」と諸大名が大砲の鋳造を見合わせたことと「亜米利加船」すなわちペリー艦隊が平穏に退去したことが影響しているのではないかと推測している。この推測が正しいなら、鳳凰丸の完成はペリー艦隊の動向に左右されていたともいえる。

この後どうやら浦賀で錫を調達する方針は転換され、幕府から下げ渡されることになったようである。四月には勘定奉行から浦賀奉行に残りの大砲を鋳造するのに必要な二百八十貫目もの錫が引き渡された。これもまたスムーズには行かなかったようで、戸田によると、錫二百八十貫目を受け取った後に品質の吟味をしたところ、「百四拾七貫三百四拾目之儀ハ下性ニ而御用ニ相成兼候段職方之者申聞候付」とあるように、受け取ったおよそ半分は品質が悪く役に立たないと職人から言われたという。この役に立たなかった錫は交換する旨が伝えられている。大砲の材料についてはこれで落着したようである。

鳳凰丸建造の経験が後に浦賀を艦船修復の場としたように、これらの大砲を鋳造した経験と実績は、その後の館浦鋳立場での浦賀における大砲生産の基盤となったといえよう。

（山本　慧）

★参考資料
・『新横須賀市史』資料編　近世Ⅱ
・『南浦書信』浦賀近世史研究会編（未来社、2002年）
・『幕末期軍事技術の基盤形成』神谷大介（岩田書院、2013年）
・『武器と防具　幕末編』幕末軍事史研究会（新紀元社、2008年）

発行：浦賀行政センター　編集：浦賀コミュニティセンター分館　〒239-0822 横須賀市浦賀 7-2-1 ☎ 046-842-4121

浦賀奉行所跡の発掘調査（その六）

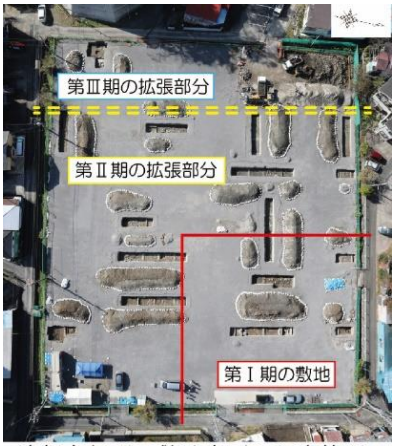
出土した江戸時代の陶磁器の碗類

浦賀奉行所は、江戸時代の享保五年（一七二〇年）一二月に開設され、慶応四年（一八六八年）年閏四月に廃されるまでの約一四八年間にわたり、江戸に至る海路を管理した奉行所で、複数回の敷地拡張や建替えや増改築が行われています。最終的な敷地の面積は約1，953坪（約6，456㎡）です。これまで二度行われた試掘・確認調査の総発掘面積は486㎡で、まだ敷地面積の約7％に過ぎません。江戸時代の出土遺物としては、大量の屋根瓦片が出土したにも関わらず、陶磁器類などの出土遺物は極少量でした。

今回はその中から、代表的な陶磁器の碗を紹介します。下図の1～5は肥前系磁器の碗で、6・7は瀬戸美濃系の陶器碗です。1は腰が張り底部の器壁が厚い「くらわんか碗」、2は直線的な高台から体部が開く「広東碗」、3と6は全体に丸みを持った「丸碗」、4・5と7は口縁部が外側に開く「端反り碗」です。なお、2と3には焼継ぎといわれる補修痕があります。これらの中で1や2の年代は一八世紀に遡る可能性もありますが、その他は一九世紀以降のものです。

陶磁器類などの出土遺物がわずかな理由としては、調査が下部まで及んでいないことや、浦賀奉行所跡が基本的に役所という行政の場で日常生活の場ではなかったこと、廃絶時に残されていた陶磁器類その他の備品類が新政府に押収された可能性が高いことなど様々な理由が考えられますが、詳細については今後の課題です。

（中三川　昇）



浦賀奉行所の敷地変遷と調査箇所

★参考資料
・「浦賀奉行所〔役所〕跡の試掘・確認調査」横須賀市教委2021
・『浦賀奉行所開設301年　浦賀奉行所跡』横須賀市教委2021

奉行所跡から出土した江戸時代の陶磁器碗類（縮尺 約1／3）

ご存じですか？

多くの企業の設立運営に携った渋沢栄一が、浦賀にも関係していることをご存じでしょうか。当時、東京石川島造船所の会長を務めていた渋沢の提案により、明治31年、東京湾の入口にあたる西浦賀にレンガ積みのドライドック「川間ドック」が設立されました。

7月3日、いよいよ新紙幣が発行となります。

DockCafé 6

―二人の海軍出身社長 前編―

日露戦争・日本海海戦を経験し、海軍の一兵として恵まれた道を歩いていた二人、寺島健と堀悌吉。海軍出身の彼らが浦賀船渠の社長となった。その当時の浦賀船渠の様子は、映画『八十八年目の太陽』で描かれている。

一人目の寺島は、明治一五年に和歌山に生まれる。海軍に憧れてその身を捧げ、働き盛りの五二歳で海軍を後にする。第六代浦賀船渠社長の山下亀三郎の意向で迎えられて八代目の社長となり、海軍出身実業家としての道を歩みだす。海軍から部下を一切引き連れることなく単身で乗り込んできたことは、当時の船渠の社員を驚かせた。また、酒豪であり、海軍料亭小松で部下を慰労することも多かったという。

海軍の先駆けになった浦賀屯営の碑が今も浦賀ドックの片隅に残されている。そこには寺島の書が刻まれている。

（江）